

# 私の戦争体験記

大 月 佐喜代 さん

戦争体験記と言っても私はまだ9歳頃で、骨ずい炎にかかり、倉敷駅付近の赤木外科病院（西ビルと若者の宿あたり）に入院しておりました。2階の病室下の道から毎朝一定の時刻になると、勇ましい軍歌のような力強い若者が歌声高らかに行進して行きました。今にして思うと水島線に乗って三菱重工業水島航空機製作所に行っていた事が（今朝の新聞で）わかりました。その当時入院しても、手術して悪い所を取りガーゼ交換（リバノールと赤チン）しかありません。戦後間もなく抗生物質ができ、足は治りました。病院の小庭ではあちこちで七輪で自分の食事を作っていました。母は毎日、西中新田東中（今の役所）の辺りから歩いて、家の事を済まし来てくれました。家は農家だったので、忙しい頃は倉商の生徒さんが4～5人手伝いに来てくれました。

病院の2階の部屋から見える所に人々が並んで、食料品を手に入れている光景も見ました（今のへん見歯科裏道）。戦後になって、病院のすぐ前の道（旧国道2号線）で闇市場が立ち並びにぎやかでした。また、広島に原爆が投下された翌日には、どんなにして来られたのか、患者さんが何人か痛々しい形相で来られていました。前日は西の空は真赤だったのも見えました。

父は3人兄弟の長男で海軍から帰りましたが、弟は近衛兵で東京から帰り、19年に比島（フィリピン諸島）作戦に岡山から出征し、死亡しました。従妹は百日で母に抱かれ駅まで連れて見送り、それが最後でした。伯母は「しづえ（老松）」の踏切で見送ったのが最後だったそうです。何と悲しい事でしょう。出征の折、日の丸の旗や海軍の旗のきから庭にひらめいたのを3回みたことになります。幼少の頃は、はしゃいで眺めていたと思います。悲しかった家族のことは、私にはまだわかりませんでした。残った祖父は2つ違いの弟をおぶってトラクターや牛を使っていました。残った人々は、苦勞の連続だったと思います。資料として祖父が大切にしていた「岡山県戦没者名簿（倉敷）」

を私が持って時々叔父を偲<sup>しの</sup>んでおります。

この様な戦争があって今があるのだと、時々思い出します。

- 
- 1 水島線...水島臨海鉄道のこと。
  - 2 リバノール...殺菌・消毒に用いる外用剤。皮膚を刺激しないので、外傷ややけどなどに用いる。
  - 3 赤チン...マーキュロクロム水溶液のこと。皮膚・粘膜及び創傷の消毒などに用いる。
  - 4 抗生物質...ペニシリンなど、カビ・放線菌などの微生物によってつくられ、他の微生物や細胞の発育または機能を阻害する物質。
  - 5 倉商...岡山県立倉敷商業高等学校のこと。
  - 6 闇市場...正規でない方法や価格における取引が行われる市場。
  - 7 近衛兵...大日本帝国陸軍の師団の一つ、「近衛師団」に配属された兵。

# 戦争の思い出

三宅正枝さん

昭和20年8月9日、<sup>(1)</sup>灯火管制が続き全ての家の灯りが漏れないようにしていたのに、急に昼のような明るさに驚き戸外に飛び出すと、大きい<sup>(2)</sup>照明弾が宙づりになっていたが、他に何事もなかったので、そのまま寝て終わった。

翌朝、巡査が来てすぐに駅に集合との事で、リュック1つ持って駆け付けると、既に貨車いっぱい人が詰め込まれていた。当時北朝鮮にいた私は<sup>(3)</sup>満鉄に勤めていたが、事情があって終戦直前に辞めていた。何も知らされず貨車に乗り、止まった所で降り、小学校の校舎に1泊した。翌日、全く連絡が取れない、各自で南下せよと言われた。誰も何も言わず黙々と歩いたが、気が付けば一緒に避難した朝鮮人は1人も居なかった。守ってくれると思っていた<sup>(4)</sup>憲兵巡査が1番に逃げ、元気な男性は全て前日現地<sup>(5)</sup>召集され、女子供老人があてもなくただ黙々と歩いた。9月になっていたのだろうか、<sup>(6)</sup>ソ連の兵隊が先に進み、敗戦国民が味わわねばならぬこと全てを味わった。

下着だけで赤ちゃんをおんぶしていた女性に、「どうしたの?」と尋ねると「朝鮮人に身ぐるみ剥がされた。」と言っていた。あの人はどうなっただろうか。野に寝たり山に寝たりで、血の小水が出たと言っていたお年寄りはどうなっただろうか。北朝鮮に居た私は戦争中に空襲もなく、<sup>(7)</sup>配給も優遇され余り苦しみは無かったが、戦に敗れ立場が逆転し、日本人避難民どもと叫ぶラジオの声に<sup>(8)</sup>望郷の念を募らせた。家政婦や農家の手伝いなどにも行ったが、日本に帰れるようになるまでずっと居なさいとよく言われた。

自分より困っている人を助ける。人間としての素直な心は、田舎の人の方が勝っているとよく思ったものだ。逆の立場だったら言えただろうかと恥ずかしく思う。同じく北朝鮮にいた従妹は、出産10日目に夫が召集され、2日後にソ連進入で避難を余儀なくされた。3人の子供を連れていて、生まれたばかりの赤ちゃんを抱いた従兄の会社の社長が、自分の家族を探さねばと、私の母に赤ちゃんを預けて立ち去った。私もその赤ち

ちゃんをよく抱いて歩き，ロシア人の難を逃れることができた。略奪暴行はどここの国でも敗戦国民が味わわねばならないようだが，法に守られねばそれが人間の本性であろうと悲しく思う。戦争が無ければ当時の生活が続けられたのにとと思うが，朝鮮人は日本が戦に敗れたから束縛されない生活を取り戻せたのだ。

当時勤めていた満鉄の職員に1人朝鮮人の女性がいたが，その人の父親は同じく満鉄で2等バスを貰<sup>もら</sup>っていた。敗戦で引揚げの途中その人に会った。日赤<sup>(9)</sup>の腕章を巻いていて毛布や缶詰をくれ，銀行が開いていればお金をあげられるのにと言った。その毛布は日本人の男性に取られ売り飛ばされた。朝鮮人に助けられ日本人に裏切られ悲しかった。中国と戦争をしていたのに，近くにいた中国人が父の兄に世話になったとよく餃子<sup>ぎょうざ</sup>を届けてくれていた。中国人は恩を忘れないのだと父が言っていたが，全ての人に当てはまるかどうかは判らないが，人間性に隔たりは無いと思う。現在，日本の支配から逃れた朝鮮が分断されているのを気の毒に思う。特に北朝鮮は恵まれていないようで，親しくしていた人がもうこの世にいない人が多いだろうと，晴れた青空を眺め，この空が朝鮮に続いているのだと切なくなる。

どうかどこの国も戦争など起こさず，どこの国が関わりなく平和に暮らせるように，そのための努力を惜しまず生きて欲しいと切望する。

空の青雲の白さよ戦のさなかにありても空かくありき

振り返る若人の散華<sup>(10)</sup>せん日もかく空は青々としてすみ渡りいし

征<sup>(11)</sup>きしまま帰らぬ人を<sup>しの</sup>偲び居り70年経ても消えぬ面影

- 
- 1 灯火管制...戦時において民間施設および軍事施設・部隊の灯火を 管制し、電灯、ローソク等の照明の使用を制限すること。
  - 2 照明弾...飛行機・船舶・車両などから夜間などに発光する物体を空中に放ち、周囲を照らし視界を確保または合図を行うためのものである
  - 3 満鉄...南満州鉄道株式会社の略称。日本の 満州 経略上のかなめとなった半官半民の国策会社。

- 4 憲兵...隊内の秩序維持を主任務とする兵隊。日本では明治 14 年(1881)に陸軍に設置され, 犯罪捜査・軍紀維持・思想取り締まりにあたったが, 次第に権限を拡大し, 公安対策・思想弾圧・防諜などにも強い権力をふるった。
- 5 召集...呼び出し集めること。
- 6 ソ連...ソビエト社会主義共和国連邦の略。
- 7 配給...品物などを一定の割合でめいめいに配ること。
- 8 望郷...ふるさとをなつかしく思いやること。
- 9 日赤...日本赤十字社の略。
- 10 散華(さんげ)...亡くなること。特に, 若くして戦死すること。
- 11 征く...敵を討ちに行く。

# 私の少年時代の疎開体験

岩田 侑三 さん

私は今年80歳になります。太平洋戦争末期は、国民学校4年生でした。その頃、兵庫県の尼崎に住んでいました。昭和19年7月頃より、京阪神地域でも、「警戒警報、空襲警報」が頻繁に出され始めました。学校では、国民学校児童を安全な場所に疎開させることを検討していたようです。集団疎開<sup>(1)</sup>としては、日本海側の田舎のお寺など、縁故疎開<sup>(2)</sup>では、両親の生家や田舎の親戚などへの疎開です。

私は、その年の8月13日、母親の生家がある倉敷市東町（現本町 森田酒造西隣）に疎開することになり、祖父母、叔父伯母にお世話になることとなりました。旧国鉄<sup>(3)</sup>で甲子園口から三宮で乗り換え、4時間あまりをかけて倉敷に着いたように覚えています。あまがさき<sup>(4)</sup> 尼崎市立武庫国民学校から倉敷東国民学校に転入したのです。



倉敷東小学校（昭和10年頃）

当時は、夏休みでしたが、町内生徒と共に、手旗信号<sup>(5)</sup>・モールス信号<sup>(6)</sup>・訓練実習に努めました。現在とは違い、各家庭には兄妹も多く、みんなと仲良くなり、年長者から丁寧に教えてもらいました。良いことも悪いこともして一緒に遊んだもの

です。当時は、「いじめ」のようなことはなかったように思います。学校にプールなども無く、老松町の川まで泳ぎに行きました。

子どもたちは、着ている服に、住所・本人氏名・世帯主氏名（私は祖父氏名）・続柄・血液型を書いた白い布を必ず付けていました。町内の子どもたち皆で自宅から学校まで通いました。

祖父母の家に疎開してから、4年生の間は、学校で勉強もできましたが、5年生の5

月になると勉強どころでは無くなり、<sup>くわ</sup>鋤を持って向山で<sup>(7)</sup>開墾作業をして、「サツマイモ」の植え付けが日課になりました。文字通り青空教室です。先生の監視も厳しく、懸命に作業に努めれば、国語の本を読むことができるが、怠けるといつまでも作業に努めねばならない制度でした。

戦争中は、<sup>あち</sup>阿智神社前の北階段（現本町 森田酒造前）に向かって、一般市民はもちろん、通学中の倉商・倉工・倉女（現青陵高校）の生徒たちも自転車から降りて、「戦争に勝ちますように」と<sup>(8)</sup>合掌する毎日でした。

記憶では、当時鶴形山トンネルの中で学徒動員の生徒諸君が飛行機部品製造の作業をされておられたように思います。私たちは、下校時のみ、トンネル横の階段を利用し、観龍寺から井上家住宅経由で帰宅していました。

その年の6月17日から22日には、大高の農家へ勤労奉仕作業に行っていました。この頃、B29爆撃機が、何機も東に飛んで行くのを見て、幼心にも恐ろしくなり、畑の中から南の空を見た記憶があります。

岡山の空襲は、6月29日の深夜でした。私も防空壕に避難しました。早朝、東の空を見ると真赤であったことを今でも思い出します。祖父が「次は倉敷が空襲にあうかもしれぬ」と疎開先を検討してくれ、<sup>めく</sup>総社や足守の親戚を廻ってくれるが、別の親戚も入居しており、7月上旬にやっと、総社町服部（現総社市金井戸）の祖父親戚にお世話になることとなりました。

疎開先は決定したのですが、交通面に問題があり大変でした。当時は客車が少なく、貨物車優先の時代で、伯備線の汽車に乗れませんでした。

そこで、倉敷の街から総社市の金井戸まで、数回徒歩にて祖父母と共にリヤカーで荷物を運びました。当時10歳です。到着するまで大変でした。歩いて何時間もかかり、7つ池での休憩は、何よりの楽しみでした。思い出してもよく歩いたものです。汽車が利用できても同じで、総社駅より東に約50分もの道のりを時間をかけて歩き、疎開先まで頑張りました。

倉敷東国民学校から<sup>(9)</sup>総社町立服部国民学校へと転入しました。真夏にて、勉強もそこそこで、短い期間でしたのであまり記憶がありません。しかし、夏休みの宿題の「干草」10貫目刈って提出するようにとの宿題には弱りましたが、8月の終戦により中止となり助かりました。当時は、「食べることと逃げることが合言葉」でした。

飛行機で沖縄へ飛び立つ<sup>(11)</sup>予科練<sup>(12)</sup>特攻隊の志願者だったのでしょうか。当地出身者だったのか、村の上空を何回か旋回され、家族との最後の別れだったのでしょうか。最後に翼を左右に振られて飛び立って行かれる風景を数回見かけ、涙が出た記憶が残っております。

昭和20年8月15日の正午ごろ、隣の家で天皇陛下の玉音放送を近所の人とラジオにて聞いていたのですが、内容がわからず、皆さん泣いておられて、日本が負けたことを知らされました。終戦により、再度倉敷の祖父母の家に帰り、9月にはまた倉敷東国民学校に転入しました。

学校の教育方針が180度変わり、自由主義となり、先生諸氏も戸惑いがありました。教科書も軍国主義的な箇所は、次々と「墨」で塗り潰すのです。広島原爆投下の説明なども。そして、10月下旬に1年2ヵ月ぶりにやっと尼崎市へ帰郷し、母・兄に再会しました。学校も尼崎市立武庫国民学校に帰ったのです。結局この間に、尼崎・倉敷・総社の3ヶ所の国民学校を転出転入合計8回しました。

戦中・戦後にて、当時は、遠足も学芸会も運動会も無く、もちろん6年生の修学旅行も無かった時代でした。時代が時代だけに、教科書も十分ではなく、新聞紙同様の教科書でした。私の小学生時代はこの様な時代でした。

今思い返すと、71年前ですが、9歳から10歳のころ、このような経験をしました。その後社会に出て、苦労もありましたが、当時のことを思い出し、忍耐力・協調性・健康には、人に負けないように頑張ってきた。今思うと、このような戦争の時代は二度とあってはならないと思います。

.....

- 1 集団疎開...集団で行われる疎開。特に，第二次大戦中の学童疎開をいう。
- 2 縁故疎開...親類や知人を頼ってする疎開。
- 3 国鉄...日本国有鉄道法に基づき日本の国有鉄道を運営していた事業体である日本国有鉄道の通称名。
- 4 倉敷東国民学校...現在の倉敷市立倉敷東小学校。
- 5 手旗信号...手に持った赤・白の小旗で一定の形を表して通信する信号。
- 6 モールス信号...短符号（トン）と長符号（ツー）の2種類の組み合わせによって文字を表し，船舶間の通信や海難事故の救助信号として利用された。
- 7 開墾...山野を切り開いて農耕できる田畑にすること。
- 8 合掌...両てのひらを顔や胸の前で合わせて拝むこと。
- 9 総社町立服部国民学校...現在の総社市立総社東小学校のこと。
- 10 貫目...重さの単位。1貫目 = 3.75 k g
- 11 予科練...「海軍飛行予科練習生」の略称。小学校高等科卒（乙種），中学四年修了者（甲種）を主とする志願制で，訓練を経て飛行科下士官となった。
- 12 特攻隊...特別攻撃隊の略。生還の見込みが通常よりも低い決死の攻撃，もしくは戦死を前提とする必死の攻撃を行う戦術部隊のこと。

# 戦場へ行かない戦争体験記

吉岡 謙 さん

1945年8月15日に太平洋戦争が終わった。我が家や身内にはこの大戦によって死亡した者はおらず。家も戦災には会わなかったが、私の戦争体験は終戦から始まった。私は当時、小学3年生だった。

戦後間もなく、戦勝国の<sup>(1)</sup>連合軍が我が国へ<sup>(2)</sup>進駐して来た。倉敷には、現在東中学校が建っている所にあった日本軍の軍服などを作っていた<sup>(3)</sup>被服廠の工場が進駐軍に<sup>(4)</sup>接收され、そこへ連合軍が進駐していた。

その際に、私が住んでいた家は、<sup>(5)</sup>山麓の小高いところにあって、外観が洋館風だった為に、駐留しているところから目立って見えていたらしく、駐留している軍の高官の住宅として接收され、立ち退きを命じられた。

父は貧乏学者だったが、本や資料が大量にあった為に、それらが収まる家が必要だったので、進駐軍が指定した立ち退き期限内には転居できそうになく困ったが、近所の養鶏家の善意で、空いていた鶏舎の一部へ、本や資料と共にかろうじて引越した。その後まもなく、養鶏場の事務所として使っていたと思われる建物を手入れして、一間だけの豊敷の部屋を作って住居として貸して下さり、本や資料は鶏舎へ置いたまま人間だけが移り住んだ。

何か月か経って、白楽町に住んでいる父の<sup>(6)</sup>遠縁から、貸していた借家が空いたとの連絡があり、そこへ転居して1年以上を過ごしたと思う。

その後、進駐軍は撤退して、私の家は返還されたが、原状には戻されてなく、補償も全く無かったが、敗戦国の悲しさで、文句ひとつ言えなかった。

喜んで我が家に帰ったが、そのあまりの変わり様にびっくりした。我が家は市の台帳によれば、1928年の建築で、設計は有名な建築家の西村伊作<sup>いさく</sup>で、現在は岡山県近代化遺産になっている。

しかし進駐軍は、外壁の小さな砂利を含んだ凹凸のある漆喰<sup>(7)</sup>壁は、全体にペンキで塗りつぶして、玄関から道路までの間には、雨除けらしい廊下のようなものが付けられ、家の東側には二間が増築され、南側にあったテラスは撤去されて接している部屋が広げられていた。家の裏には、高さが4 m位の屋根だけで壁のないボイラー建屋ができていて、風呂給湯用のボイラーが据えられていた。その隣には現場打ち<sup>(8)</sup>の形だけの自然曝気<sup>(9)</sup>式の浄化槽が埋められていた。

家の中に入ると、家中の壁や建具などにはすべてペンキが塗られ、和室の板の天井は漆喰<sup>(7)</sup>で塗られた上にペンキが塗ってあった。廊下・洋室・トイレ・洗面所・台所・階段などの床や踏面<sup>(10)</sup>は、土砂が付着した靴で歩いた為に傷だらけで、ささくれているところが多く、とても裸足では歩けなくなっていた。和室の畳は全部上げられて、そのままだと床面が低くなるので、床上げされていた。風呂は大きくて長いタイル貼りの浴槽に変わっていたが、この風呂に入浴できるだけの湯を張るには、当時薪灰屋<sup>(11)</sup>で売られていた「まき」が約6把必要で、入浴には大変苦労した。トイレは水洗になっていたが、長期の使用は考えていなかったらしく、浄化槽の蓋はコンクリートで塗り固められていて、浄化槽の管理は不可能になっていた。

進駐軍が行ったりリフォームはもの凄くお粗末で、返還後入居してから後、何部屋もの漆喰天井が落ちたり、建具が曲がって動かなくなった為に隙間が出来て雨風が入ってくる有様で、その都度手入れして生活してきた。

畳敷の和室は畳を上げて床上げされていたので、そのまま畳を入れるとドアの開閉が出来なくなるために、大工に頼んで切り下げて畳を敷いた。

その他のところには、持ち帰った父の本や資料が山積みになっており、父はそのどの位置にどのような本や資料があるのかを良く憶えていて、家人がそれらに触って動かすと分からなくなると言う事から、父が亡くなるまでは本や資料の移動を伴う改修工事は出来なかった。

我が家が進駐軍に接收されて40年以上経って、父が亡くなった翌年の1987年か

ら、ようやく本格的に改修を行うことができた。長期間にわたってかなりの費用を必要としたが、建築に詳しい人に言わせると、費用の面からだと一度全部壊して立て替えた方が安くついたはずとの事だった。

戦争体験と言うと、戦争で亡くなった人々や家を空襲で焼かれたことなどに思いが行くのは当然だとは思いますが、私達のようなこともあったのだと言う事を知っていただき、私達のような犠牲者を2度と作る事の無い世の中になるよう願っている。

- 
- 1 連合軍...ドイツ、イタリア、日本と敵対したアメリカ、イギリス、中華民国、ソビエト連邦などの国家連合軍。
  - 2 進駐...軍隊が他国の領土内に進軍し、そこにある期間とどまること。。
  - 3 被服廠...旧日本陸軍部隊に支給する被服品の調達、分配、製造、貯蔵を担当した工場と、これを統括した機関の総称。
  - 4 接收...国などの権力機関が、個人の所有物を強制的に取り上げること。。
  - 5 山麓...山地と平地の境界部。
  - 6 遠縁...遠い血縁。また、その人。
  - 7 漆喰...消石灰に粘着性物質と麻糸などの繊維を加え、水でよく練り合わせたもの。砂や粘土を加えることもある。壁や天井などを塗る。。
  - 8 現場打ち...コンクリートやリベットを工事現場で打ち込むこと。。
  - 9 曝気...空気と排水とを接触させて酸素を供給すること。水質の浄化を行う微生物に酸素を供給する基本的な方法
  - 10 踏面...階段の足を載せる板の上面。
  - 11 薪炭...たきぎとすみ。

# 戦後七十年の想いを歌に

岡 部 学 さん

父が戦争で尊い命を<sup>(1)</sup>祖国に<sup>ささ</sup>捧げ戦没し、母と私が遺族となりました。戦争の記憶はわずかながらで、母の実家（福田町福田南）の東にある山のふもとの防空壕<sup>ごう</sup>、その中で西の空に爆撃機（B29）が飛び、爆弾が落ちてくる光景、そして戦争後の幼少の頃に戦争の遺留品<sup>(2)</sup>を見たことぐらいです。

私は遺児として母の実家で何不自由なく育てられましたが、中学生になると我が家では無いと、真剣に将来のことを考えるようになり、叔父の農業、母の内職の手伝いをしながら勉強しました。高校生になると自分の家を建てたい夢を持ち、一生懸命でした。卒業後、水島の会社に就職し、交代勤務で5年間働きながらも大工さん2人の下手間をし、悪戦苦闘の2年間でやっと生活の出来る状態の新居ができました。皆さんに感謝感激でした。

今までの想いを作詞しました。

「平和な時よいつまでも」

一 . 生まれた時は	戦争だ	今も脳裏に	あの空が
思い出させる	爆撃機	おさな心に	おそろしく
何が起きたか	わからない	平和な時よ	こないかな
二 . 子どもの頃は	腹ペコだ	みんな食べたよ	芋ごはん
忘れられない	母の味	遊び疲れて	しかられて
いつも枕を	抱いて寝る	平和な時よ	早く来い
三 . 大人になった	現実には	日夜仕事に	明け暮れて
夢を追いかけて	ひたすらに	やっと <sup>かな</sup> 叶えた	僕の家
父の遺影に	手を合わせ	平和な時よ	いつまでも

平成18年4月より、母に「<sup>(3)</sup>遺族会(福田)のことを引き継いで。」と頼まれ、何もわからないまま交代して遺族会の皆さまにいろいろ教わりながら行事に参加し、お世話もさせてもらっています。平成25年より近くの水島緑地福田公園内にある「平和の鐘」を鳴らして黙とうし、二度と戦争のない平和な世界を願いに行っています。その想いを作詞しました。

「平和の鐘を鳴らそうよ」

一． 高く澄んでる 青空に 突然すさまじい 空襲が  
炎の手が上り 焼け野原 怖く悲しい 戦争は  
ああ 平和の鐘を 鳴らそうよ 鳴らそうよ

二． まるでならくの あの時代 多くの命が 失われ  
苦しくつらい ことばかり 今の幸せ 感謝して  
ああ 平和の鐘を 鳴らそうよ 鳴らそうよ

三． 二度と戦争 しないよう 子や孫たちへと 伝えよう  
希望に満ちた 明日のため 世界平和を 願いつつ  
ああ 平和の鐘を 鳴らそうよ 鳴らそうよ  
ああ 平和の鐘を 鳴らそうよ 鳴らそうよ

---

1 祖国...先祖から代々住み続け、自分もそこで生まれた国。

2 遺留品...死後に残した品物。遺品。

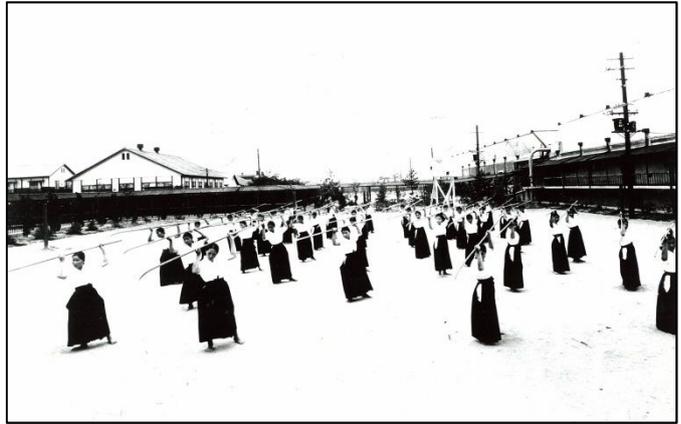
3 遺族会...戦没軍人の慰霊、遺骨収集、遺族の福祉をおもな目的とする団体。

# 戦争の頃の小学生の生活の様子

岡 本 末 子 さん

私が国民学校2年生の時、戦争が始まりました。寒い日の朝、皆と並んで学校へ行っていました。酒津から子供の足で40分はかかります。その時、どこかのおじさんが「戦争が始まった」と言いながら、自転車で走って行きました。これは恐ろしいことだ、どうしたらいいのかと、私は心の中で考えながら学校に行きました。3年生になってから、もう学校では勉強する時がないくらい、兵隊さんが乗っている汽車が通る時間が来ると、毎日山陽本線の線路沿いに立って旗を振りながら見送ってあげました。夏休みは馬の食べる草の草刈が宿題でした。1人何束と決められていたので、私は父と一緒に山の方や河原の方へ行って葦あしやススキを刈って干して、大きな束をいくつも作り学校へ持って行きました。高梁川はしの土手は昔は道はなくて、綺麗な芝生きれいが植えてありました。その芝生も40センチくらいを四角に掘って、束にして学校へ持って行きました。飛行場へ植えるためだったようです。また冬には、高梁川はしを船で渡り、八幡山はちまんにある松の木を運びました。2メートル位に切った松の木を1人3本位担いで降りてくるのですが、松の木から油を採るのだと聞きました。また中洲す小学校の校庭の周りは、防空壕ごうを作っていました。警戒警報が鳴り出したら、皆その穴の中に隠れていました。ウーと鳴ったら警戒警報で、ウーウーウーと鳴ったら空襲警報です。皆その防空壕ごうの中に入ったら、いつB29が飛んで来るかわからないので話もできません。その防空壕ごうも皆町内の人や家の父母たちが来て、穴を掘りその周りに畳を敷いて、その上に畳を乗せて土をかけて丈夫に作ってくれました。日数が過ぎるとその畳の中から草が生えてきて、異様な臭いがしてくるようになりました。子どもたちは頑張りました。あの頃は運動場全部が芋畑でした。空襲が激しくなると、私たちは机と椅子を運んで、各町内のお寺やお宮で勉強をしました。でも、蝉せみの声を聞きながらの勉強も楽しかったと思います。体操の時間は薙刀なぎなたの練習があり、敵が攻めて来たらこれで突きなさいと教えられました。昭和20年6月、水

島に空襲がありました。私たちはその時学校へ行く途中だったのですが、私たちは皆すぐ家に急いで帰り、爆弾の落ちるのを目の前で見ました。その時、大勢の死者や重傷者が出たりしたとは知りませんでした。あの頃はシンガポールからと言って、ゴム製品を色々と学校へ送ってくれました。ボール、消しゴム、運動靴等色々あ



りましたが、どれもくじ引きで、なかなか皆には渡らなかったと思います。あの頃は靴等履いている人はおらず、<sup>わら</sup>藁で作った草履でした。それも遠いところから来る人はボロボロになってしまうので2日も履くことは出来ず、素足で学校に行きました。昭和20年8月15日は暑い日でした。子どもたちは酒津の池で泳いでいましたが、その時誰かが「戦争に負けたのですぐ帰ろう。アメリカ兵が来る。」と大声で言ったので皆すぐ家に帰りました。その途中、「アメリカ兵が来たら殺される。」と言ったので、私は本当にその言葉を信じていました。死ぬ覚悟でした。その後、倉敷にもアメリカ兵の駐屯地が出来て、いつもジープに乗った兵隊さんがいっぱい来ました。ターバンを巻いた人、真っ黒い顔の人が乗ったジープが何台も何台も続いて通りました。その人たちは子どもたちにチョコレートやガムをくれました。アメリカ兵も日本の子どもが可哀想に見えたのでしょう。時々友達と会ったらこんな話もしていましたが、80歳を過ぎるとその人たちもいなくなり、話すこともなくなりましたが、このような事があったことを後世の人に知ってもらいたくて、思い出しながら書かせてもらいました。先日も中洲<sup>す</sup>小学校の校庭に立って、昔を思い出して来ました。

# 戦時下の大原美術館

赤木徹志さん

大原美術館での思い出である。現在と同じように正面に小さな木造の門があった。扉は開いたままである。当時は一日に、おそらく一人の入館者もない日があったのではなかろうか。

昼下がり、<sup>せみ</sup>蝉取りの網を持って中庭に入った遊び仲間が入り口をのぞく。中にはいつもなら、老婦人が入場料と引き換えにスリッパを渡しているはずだが、その日は誰もいない。一人が入りだすと、頭の黒いネズミ共は一列になって階段をあがった。はだしのまま両手にゴム草履を下げてゾロゾロと。



二階の広間に出ると、少しばかり日常とは違う雰囲気<sup>(1)</sup>に、みな神妙<sup>(1)</sup>にしてまわりの壁に取り付けられた額<sup>まわ</sup>の絵を見廻す。どの絵を見ても、学校の図画室にある絵とは全然違う。人物はみな外人ばかりである。

景色は書いてあるがボヤッとして霧に包まれた様な絵。桁外れに大きな絵。ああ、これが美術館か。一同キョトンとしたまま声はない。要するに、猫に小判ならず、ネズミ共に小判の1日であった。

当時、この美術館で特異な出来事があった。確か、ある夏の正午ごろのことである。爆音とともに東の空から鶴形山の上空に向かって飛行機が飛んで来た。見上げるとオレンジ色の機体で、軍の練習機であることはすぐわかった。通称赤トンボといわれた<sup>(2)</sup>複葉機である

その飛行機の爆音が、鶴形山の中央付近で急にせき込みはじめ、音が止まると同時に機首を下げて急降下しながら機影が山の向こうに消えた。間違いない。飛行機の墜落だ。

私はトンネルを目指して走り、見当をつけた美術館あたりまで走ってきた。ふと見ると、美術館の中庭にある松の一本に白い落下傘<sup>(3)</sup>が頂上あたりから下へダラリと垂れ下がっており、塀に隠れて下半分は見えない。恐らくは操縦士がその下にはいたのだろうか。あまりに低い高度からの脱出で傘が十分開かなかったのではなかろうか。想像もしない悲痛なできごとであった。

驚いた事に、通用門では早くも駆けつけた憲兵が美術館への立ち入りを禁止していた。警官よりも早くである。色々な突発事件<sup>(4)</sup>で、こんなに早い対応を私は見たことがない。それにしても、飛行機の機体は何処に落ちたのか。その後、うわさすら聞くことが無かった戦時下の情報統制<sup>(5)</sup>のすごさである。

太平洋戦争の前、美観地区の掘割<sup>(6)</sup>に木造の屋形船<sup>(7)</sup>がつながれていた。

広島から、瀬戸内海を通り児島湾に入り、倉敷川の河口から遡上してきた船である。全長は20mはあろうか結構大型の船で屋形のなかは料亭の造りである。毎年冬にやってくる牡蠣船<sup>かき</sup>だった。

中橋の上手で南側道路に寄せて停泊していた。乗り降りには、30センチ幅の<sup>(8)</sup>バタ板を渡ることになる。おそろおそろ両親につれられて食事に入った記憶がある。いま考えてみても、この掘割には結構大型の船がはいってきていたものである。河口から倉敷川にはたくさんの橋があるが、これを通過するために船は帆柱を倒して入ってきた。大型の船が入れたのは、川底も昔のほうが深かったのではないかと思う。

倉紡工場に原綿を運ぶ通路の川岸には、石段と傾斜でできた荷上場があった。船で運ばれた<sup>(9)</sup>原綿は、長さが1メートル程度で断面が50センチ角の麻布(ドンゴロス)で巻かれ、鉄のバンドが両側にはまっていた。

重そうな塊である。これを船にある起重機<sup>(10)</sup>のマストで釣り上げて、傾斜場で待つ大八<sup>(11)</sup>車の荷台に下ろす。

3 ~ 4 個積み込むと、背丈は低いが筋力はけた外れの仲仕が、ガラガラと音をたてて引き始める。斜面を上がるまでは荷台の後ろから仲間が押す。石畳は真っ直ぐ倉紡工場の門内まで続いている。いまでもこの道路には荷車に合わせたレール型に石が敷き詰められたまま残っているのが見られる。

この<sup>(13)</sup>かいわいで、いまでも記憶にあるのは前神の交番である。橋の南西の隅にガラス戸の多い平屋の交番所があった。

日中戦争当時、南京が<sup>(14)</sup>陥落したとき、夕方から<sup>(15)</sup>提灯行列が開かれた。その行列の解散地点がこの交番前だったと記憶する。

スタートは駅前広場で、元町を通ったか、<sup>えびす</sup>戎町商店街を通ったかいずれにしても美術館前の掘割を<sup>(16)</sup>通ってゾロゾロ進むことになる。

全員丸い提灯を<sup>(16)</sup>掲げ「南京陥落万歳」を叫びながら歩くのである。

南京がどこやら、陥落が何の意味やら分からないまま歩いた記憶があるが、考えてみれば80年近くたった今、南京陥落の影に起こった<sup>(16)</sup>虐殺事件が、いまだに論争の種になることを予測した大人は、当時誰ひとりいなかったらう。

- .....
- 1 神妙... 普段とは違って、おとなしくすること。
  - 2 複葉機... 上下に二葉以上の主翼を有する飛行機。
  - 3 落下傘... パラシュート。布製の大きな半球形の傘の空気抵抗により、人や物を安全に落下させる装置。
  - 4 突発... 突然に起こること。
  - 5 情報統制... 国家等の公権力が、出版物や言論を検査し、不都合と判断したものを取り締まる行為。
  - 6 掘割... 地面を掘ってつくった水路。ほり。
  - 7 屋形船... 家の形をした覆いを据え付けた船。
  - 8 バタ板... 足場を作るために設置された板。
  - 9 原綿... 紡績の原料として使用するため、綿繰り車にかけて種を取り去っただけの綿花。
  - 10 起重機... 重量物を吊り上げて、水平または垂直方向へ移動させる機械。クレーン。
  - 11 大八車... 荷物運搬用の二輪車で、2、3人で引く大型のもの。
  - 12 仲仕... 港や河川で、船の貨物の上げ下ろし作業に従事する人。
  - 13 界限... そのあたり一帯。付近。近辺。
  - 14 陥落... 攻め落とされること。

- 15 提灯行列...戦勝や各種の祝いごとなどの際に、祝意を表すために、夜間、たくさんの人々が火をともした提灯を持って、列を組んで街路をねり歩く行事。
- 16 虐殺...むごたらしい方法で殺すこと。

# 航空機工場と航空基地建設の実態

## アジア・太平洋戦争下 水島軍事機密史料集復刻

小川 薫 さん

### はじめに

私は、昭和5年(1930)12月26日、旧岡山県川上郡宇治村<sup>ささ</sup>笹尾2480番地(現高梁市<sup>はし</sup>宇治町)(当時は12世帯、現在6世帯)の農業兼大工・小川熊次郎の次男に生まれた。

### 戦争への道

<sup>(1)</sup>時局は戦争へと向かっていた。思いつくままに記してみる。

昭和12年1月7日、日本は中国に全面的な戦争を仕掛けていった。いわゆる支那事变の開戦である。

昭和12年9月、陸・海軍は国民に対して、「<sup>(2)</sup>拳国一致」のビラを発行し、日本は負けを知らない神風の国、天皇陛下のために命を捧げよと、国民の気持ちを昂揚し、<sup>(3)</sup>士気の高揚を計った。

対米英宣戦の<sup>(5)</sup>大詔発行は、昭和16年12月8日、午前11時45分のことである。いよいよこの刻に大東亜戦争に突入したのであった。

それまでの尋常小学校・高等科は昭和16年4月から「国民学校初等科・高等科」と改められた。ナチス・ドイツのフォルクスシューレにならって名付けられ、「<sup>(6)</sup>皇国ノ道ニ則リテ初等科普通教育ヲ施シ国民ノ基礎的<sup>(7)</sup>錬成ヲ為ス」ことを目的として発足したものである。

### 学徒動員へ

食糧増産計画の下、建国した<sup>(8)</sup>満州には広大な土地があったが、成人は軍人として必要なため、開拓のために人数が不足していて、国民学校高等科生にも募集の範囲が広げられ、田舎の農家の次男ということで、<sup>(9)</sup>満蒙青少年開拓義勇団に行くようにと説教された

が、私は応じず、満州には渡らなかった。

しばらくして、戦局は悪化の道をたどり、大本営のラジオ放送も敗色の色を漂わせるようになり、<sup>(10)</sup>富国強兵・<sup>(11)</sup>鬼畜米英・大東亜共栄圏とラジオ・新聞で報道され、<sup>(12)</sup>国賊・<sup>(13)</sup>非国民と呼ばれ、憲兵に連行されるよりはマシ、と三菱重工業航空機製作所へ学徒動員として<sup>おもむ</sup>赴いた。

配属されたのは、航空機製作所第二組立工場であった。第一組立は胴体の骨格を組み立て、我が第二組み立ては胴体の骨格へ外板の<sup>(14)</sup>ジュラルミン板の<sup>(15)</sup>鋸打ち、翼や脚の取り付けで、担当部は操縦士の席の上の天蓋の取り付けであった。第三組み立ては配線や機器の取り付けで、飛行機完成の形に仕上がっていた。水島では、昭和18年4月から大空襲までに一式陸上攻撃機513機を造った。

昭和20年6月22日午前8時36分、米軍B29爆撃機110機による大空襲で焼け野原となった。

その後は、連島の山の北、竜の口に半ドーム型の建屋で戦闘機紫電改9機を造った。

8月15日、前夜から正午に重大放送があると聞いていてラジオに耳を傾けたが「忍びがたきを忍び、耐えがたきを耐え・・・」のところが雑音混じりで聞き取れただけで何がなんだか、周りの人の話して「戦争は終わったらしい。」と知った。

「ついにこの日が来たのか・・・」これで田舎に帰れば麦でも芋でも腹いっぱい食べられるというのが実感であった。(その時15歳)

支那事変は、当初、軍は1年ほどで勝利すると豪語したものの、重慶の奥地まで進撃したころには兵隊の人数・戦車・弾丸・食糧・医薬品・看護師など後方支援が不足していた。

内地は食糧増産で、農地に工場は立てられず、昭和16年6月、海軍は水島の埋立てを決定した(軍・三菱重工業・岡山県の三者)。

旧高梁川の<sup>はし</sup>廃川地を<sup>(16)</sup>福利厚生施設、<sup>(17)</sup>養成工場、<sup>(18)</sup>宿舎、社宅、浴場などに利用、有史以来の高梁川河口沖に<sup>はし</sup>堆積した砂を持って<sup>(19)</sup>陸地の造成、広大な工場計画が行われた。緊迫し

<sup>(20)</sup>た世相で、内容は秘密で誰も知らされずに。

平成24年、京都の古書目録に「水島戦時中極秘文書」を見て、即刻得意先の書店にFAXで購入を申し入れた。倉敷・高松・山口・亀島山トンネル研究会などから問い合わせがあったが、<sup>(21)</sup>「一見の」京都の風習から私が購入できた。元山陽学園大学教授太田健一先生は終戦時に焼却処分されたはず、よくぞ残り倉敷へ帰って来たものだと、監修をご担当くださった。

軍極秘は、昭和13年2月から14件

丸秘文書は、昭和16年6月27日付1件

極秘文書は、昭和16年8月7日から14件

終戦までに 親展を含み40件を収録している。

昭和という時代が遠くなりつつあり、戦後70年という節目の年になった。

倉敷市において、昭和16年6月に海軍による海面の埋立て、軍極秘文書には、誰が命令し、どのように建設されたか、実名と押印がある。のべ350万人という兵士は赤紙<sup>(22)</sup>1枚で召集され命を落とした。誠に無念、<sup>あわ</sup>憐れのほかない。

水島を、航空機製造を、戦争を<sup>(23)</sup>風化させないために子々孫々まで「真実」を伝えたい。これが、私に課せられた<sup>(24)</sup>天命だと考えている。

- 
- 1 時局...時世のありさま。そのときの世の中の状態。
  - 2 拳国一致...国全体が一つの目的にむかって同一の態度をとること。
  - 3 昂揚・高揚...精神や気分が高まること。また、高めること。
  - 4 士気...集団や兵士の意気込み。
  - 5 大詔...天皇が広く国民に告げる言葉。詔勅。
  - 6 皇国...天皇が統治する国。
  - 7 錬成...鍛えて立派にすること。
  - 8 満州...日本が満州事変によって占領した中国東北部に作りあげた国家。1932年、もと清朝の宣統帝溥儀を執政に迎え、中華民国から分離させて建国。1945年8月、日本の敗戦とともに消滅。
  - 9 満蒙青年開拓義勇団...満州事変以降、日本から中国東北部へ送り出された農業移民団。満州国維持の軍事目的と国内農村窮乏の緩和を目的として、総勢三十万人以上に達したが、ソ連参戦により潰滅。多大の犠牲者を出し、また中国残留孤児を生んだ。

- 10 富国強兵...国を豊かにし兵力を増強すること。国の経済力・軍事力を高めること。
- 11 大東亜共栄圏...欧米諸国の植民地支配から東アジア・東南アジアを解放し、東アジア・東南アジアに日本を盟主とする共存共栄の新たな国家秩序建設を目指した、第二次世界大戦における日本の構想。
- 12 国賊...国の利益を害する者。国家に害を与える者。
- 13 非国民...国民としての本分・義務に反する行為をする者。特に、第二次世界大戦時に、軍や国策に非協力的な者を非難する語として用いられた。
- 14 ジュラルミン...アルミニウムに銅・マグネシウム・マンガン・ケイ素などを混ぜた合金。軽量で強度が大きいため、飛行機・建築などの材料にする。
- 15 鋷打ち...穴を開けた部材を接合するために、鋷（リベット）を打ち込んでしめるけること。
- 16 廃川地...蛇行した河川の直線化や、洪水防止のために幅の広い放水路の開削を行った場合に廃止される従来の河川の敷地。
- 17 福利厚生...企業が労働力の確保・定着、勤労意欲・能率の向上などの効果を期待して、従業員とその家族に対して提供する各種の施策・制度。主として従業員の生活向上を支援する目的で実施される。
- 18 有史以来...人間が歴史を記録し始めてから今まで。
- 19 堆積...積み重なること。
- 20 世相...世の中のありさま。社会のようす。
- 21 一見...初めて会うこと。京都では、お店に何らの面識なく、初めて訪れた人は入店を断られることがある。
- 22 赤紙...召集令状（在郷軍人などに対し、実際の軍務につくことを命じる書状）のこと。
- 23 風化...ある出来事の生々しい記憶や印象が、年月を経るに従い、次第に薄れていくこと。
- 24 天命...天から与えられた使命。

# 戦中戦後の体験記

金光育子さん

昭和16年6月、私が小四の時、海軍軍人だった父が乗っている軍艦が、横須賀港から出港するので、母と小高い丘の上から、東京湾を南下する艦を見送った。今、思うと母の気持ちは如何ばかりだったかと思う。

その年の12月、太平洋戦争が始まり、私が「お父さんは？」と聞くと、母は「太平洋のどこかにいらっしゃるでしょう」と言っていた。日本は、南アジア方面に進み、17年2月にはシンガポールを陥し、父が市中行進している写真が新聞にのり、びっくりした。と同時に父の元気な姿が見れて嬉しかった。

間もなく、「東京勤務になったよ。」と言って、父が突然帰ってきた18年10月、明治神宮外苑えんで学徒出陣壮行会(1)があり、父も、見送ったそうだ。多くの有望な青年を失う事になり、日本は大きな損失だったと思う。

それから父が、呉に転勤し、私も呉の女学校に転校した。その後、日本の戦況が次第に悪化し、20年7月に呉市街も、軍港も爆撃され、学校も全焼した。自宅は天應(2)なので、汽車通学で毎日、学校に焼け跡の片付けに行っていた。

ある日、通学途中、米軍の来襲で汽車は止り、私達は、汽車から飛び降りて物影に入ろうとした時、もう米機が頭上におり、私が見た時、ごっついメガネをかけた操縦士と目が合った様な気がした。やられると思った時、飛行機はよその方に飛んで行き、汽車が「ポー」と鳴ったので、友達を見ると倒れているので、駆け寄ったら「私、死んだふりしてたの。」と呑気な事を言って、「お互い命あったね。」と言いながら急いで汽車によじ登り、座席に着いたら、お弁当がなくなっていた。そのまま学校に行き、作業をしてくたくたになり帰宅した。何故、あの米機は機銃掃射しなかったのだろうか、今も時々思う。

翌日から母がザルに芋や南瓜かぼちゃを入れてくれた。どこに行くにも大事に持ち歩いた。も

う食料事情も非常に悪くなった。

その後、学徒動員で、兵隊さんのパン作りに行く事になった。毎、朝礼後、軍のトラックが迎えに来て山の方のパン工場で、小豆の石取りをさせられた。毎日暑い、薄暗い、山の横穴の中での作業は、頭がボーンと変になりそうだった。

ところが、8月6日朝礼の時、空がピカリと光り、後方で大音がして、その後B29だったろうか、私達の頭上を悠然と南の空に飛んで行った。後で、広島に原爆が投下されたと知った。その日は、パン工場のトラックは、広島に行ったそうで、私達を迎えに来なかった。先生が「今日は状勢が悪いから帰りなさい。」と言われ帰宅した。

家に母は留守で、余りに暑いので、近くの海に友人と泳ぎに行った。今考えると、広島湾には、沢山の放射能が浮いていただろうにと思う。先生が危険だから帰宅する様に言われたのに、何て事をしたのだろうかと思う。海で夕方まで遊び帰宅すると、母は、婦人会から、近くの小学校講堂に次々と運ばれて来る広島の負傷者の看護に当たっていたそうだが「薬もなく、うちわであおいで、水を飲ましてあげることしか出来なかった」と、くやしそうに言っていた。私も小学校に行って見たけど、皆さん痛い々と言いながら、1人、2人と亡くなっていった。

あの光景は、何とも言えませんでした。

そして8月15日昼、呉駅前広場に正座して、終戦の玉音を聞いた。色々な思いが、折り重なって、そこにいた人、皆で泣いた。

間もなく、私が家にいた時「ハロー」と言って、米兵が窓から覗いた<sup>のぞ</sup>ので、それは驚いた。終戦すぐ米艦が呉港に来たらしい。

9月、<sup>(3)</sup>枕崎台風が来て、3日3晩雨が降り続き、17日夜、就寝中に水と土砂が家に入りこみ、私は蚊帳<sup>(4)</sup>から出られず、このまま流されるのではと置いていたら、父が蚊帳をはずしてくれて助かった。

家は住む事も出来ず、近所の人、数軒で、家も家財道具も捨てて、舟で水島港まで来た。その時、南畝の方が親切に、ゴザや、おにぎり持って来て下さり、本当に有難かつ

た。この御恩は、一生忘れません。私達は、水島に住まい、私は倉敷の女学校（今の青陵高）に転校した。通学途中、美観地区を通る度、今まで軍港の町で育った私は、日本にもこんな落ちついた静かな町があるのかと思った。両親にも倉敷ですずっと暮らしたい、お友達もいいし、もう転校はしたくないと言った。

父も倉敷で仕事をする様になり、ずっと、この地でおだやかに暮し94才で旅立った。

戦争は、なんの恩恵もなく、人類に多大の犠牲を与え、不幸をもたらす事になるだけだと思ふ。世界中が平和で、人々が安心して暮せる様にと祈り、私も神様から頂いたこの命を大切に生きていきたい、と思っています。

- 
- 1 学徒出陣...第二次世界大戦末期の1943年以降、兵力不足を補うため、それまで26歳までの大学生に認められていた徴兵猶予を文化系学生については停止して、20歳以上の学生を入隊、出征させたこと。
  - 2 天応。呉市の地名。
  - 3 枕崎台風...1945年9月に日本を縦断した台風で、室戸台風、伊勢湾台風と並んで昭和の三大台風の一つに数えられる。終戦直後のことであり、気象情報が少なく防災体制も不十分であったため、各地で大きな被害が発生した。特に広島県では、死者・行方不明者合わせて2,000人を超えるなど甚大な被害となった。
  - 4 蚊帳...夏の夜、蚊や害虫を防ぐため、四隅を吊って寝床を覆う道具。